

テレビ・インタビュー

(一九八三年十一月十一日　迎賓館)

大統領 私も妻ナンシーも再び日本をお訪ねてきて、とても喜んでいます。この前の訪日は、一九七八年、国会議員の石原慎太郎氏のお招きによるものでした。それ以前にも、一九七一年に日本を訪れましたが、その時は、美しい古都、京都を見ることができました。

日本の歴史と文化には、私たちの心を捉えるものが多くあります。アメリカ人は、日本国民を心から称賛しております、また、皆さまの温かさ、進取の気性とチームワークの精神、家族愛、教育や進歩への情熱という強い伝統などに、大いなる称賛の念を持っています。皆さまはお国に大きな発展と繁栄をもたらされました。生活の向上を目指しての皆さまのご努力は、初めのうちは、しばしば大へんご苦労であつたことを、私はよく知っております。我慢強さ、粘り強さ、ひたむきな努力などは、人気テレビ・ドラマ「おしん」に見事に描きだされていると伺っていますが、それらの国民性が偉大な日本経済の成功をもたらしたのです。

最近、私は、東京からかなり遠く離れているという、秋田県の西沢小学校の、奥村正^{オカムラ}居校長先生から手紙をいただきました。私とナンシーに、二十七名の生徒さんのいる学校を訪ねるよう、とのお招きの手紙でした。奥村先生、私は先生の学校をお訪ねして、生徒の皆さんとお話をかつたのですが、今回の日本滞在はあまりにも短かすぎました。私たちはもつと多くの方がたとお会いし、京都、北海道、広島、奈良、長崎など、美しいお国をもっと見せていただかずと心残りです。

しかし、両国の関係は強く、かつ良好である、という確信を心に抱いて、私たちは明日、日本を発ちます。

今日、国会で申し上げましたように、両国は何千キロも離れておりますが、共通の利害と価値観で結ばれた隣人同士であり、友人であり、パートナーです。幕末の外交交渉に参加した松崎^{まつざき}満太郎は、私たちの多くがいま感じていることを、一八五四年にいっています。彼は、「日本とアメリカの心は一つ」と、ペリー提督にいつたのです。

両国は大いに繁栄しています。私たちは、自由で開かれた社会に住んでいます。けれども、世界の多くの地域は貧しく、国民に平和で自由な生活をさせようとしない独裁者が支配しています。

それゆえに、日米関係は非常に大切なのです。日本とアメリカは世界的な責任を担っています。しかし、責任を担うなかから、いつも可能性が生まれてくるのです。私たちは、経済成長と人間の進歩の秘訣を、ほかの国と分かち合うことができます。世界のいたる所で、圧政の暗黒から逃れて、自分の運命は自分で決めたいと願っている人びとに對して、私たちは民主主義の光をもたらすことができます。

日本とアメリカは明るい未来の国であり、明日を築く国です。そして、力を合わせれば、一層輝かしい明日を築くことができるのです。私たちはこの世界を、もつと安全で、確実で、繁栄した世界にできます。私たちがお互いを信じ合い、大都市や小さな町で勤勉に働く人たちの才能と善良さを信じるなら、日米はそのパートナーシップを発展させることができる、と私は心から信じています。そして、ともに力を合わせれば、日米にとつて不可能なことは何もありません。

では、喜んでご質問にお答えしたいと思います。

問 多くの皆さんもご同感でしようが、さすがにお話上手でいらっしゃいます。これはなにも、日本のテレビ・ドラマについておほめの言葉をいただいたから申し上げるのではなく、テレビで拝見したあなたの個人的なスタイルが、ほかの多くの政治家よりも、くつろいで、打ち解けていらっしゃるからです。そこで、お差

し支えなければ、日本国民があなたのお人柄に一層よく接することができるよう、このインタビューも、ご打ち解けた形で進めたいと思います。ご到着以来、日本人のびとは、あなたの日程をつぶさに見守つてしまっていました。昨日は、明治神宮で流鏑馬をご覧になつたようですが、あの典型的な日本の伝統スポーツについて、どうお考えでしようか。ついでにお伺いしますが、乗馬のほかに、どんな趣味をお持ちでしようか。

答 牧場を持つていると、乗馬以外にもいろいろありますね。牧場へ行くたびに、やるべきことはたくさんあります。今年の夏、牧場で何日か過ごした時も、二人の友人に手伝つてもらつて、垣根を百二十メートルほどつくりました。古い電柱を使ったのですから(笑い)、ちょっときつい仕事でしたけれども、けつこう楽しいものです。

いつになつたら仕事が完成するのかと、だれかに聞かれたのですが、いや仕事そのものを楽しんでいるのだから、完成するつもりはないよ、と答えておきました。そのほかにも、読書をしたり、ふだんはあまりゴルフをするほうではありませんが、この前訪米された折りに、中曾根總理からいただいたクラブを使って、これからはゴルフもやってみようと思つています。

問 ぎつしり詰まつた訪日スケジュールのほとんどを終えられたところですね。昨日は、今回の訪問についての公式の見解を述べられましたが、ここでは、もっと個人的な見解をお聞かせいただけないでしょうか。

答 ええ。ご当地でのすべてのことに非常に満足しています。まず、皆さまのおもてなしの温かさです。私がかかわりを持つた外交や政府関係の皆さまだけでなく、沿道の人びとなどが示して下さった歓迎や親愛の情は、とても心温まるものでした。かねてから私は、お互いのことをとやかくいい合つて、直接話し合おうとしなければ、問題が生じるばかりだ、と信じてきました。このたび、日本の国会でお話をし、總理やその方がたともお会いする機会を得たばかりでなく、天皇陛下にお目にかかるといふ大きな光榮に浴しました。単に外交のなかで形づくられる絆ではなく、人間としてお互いを理解し合う人間的な絆を確立できました

と思つています。世界は、こうしたことのもつと多く必要としている、と思うのです。

問 まず申し上げておきたいと思ひますのは、あなたが訪れたいといわれる土地のなかに広島と長崎をあげられたことは、日本国民の多くにとつて驚きであり、しかもそれは非常に喜ばしいという意味での驚きである、ということです。もつとも、そこをお訪ねいたぐために、ジョン万次郎のいう聰明な人物になつていただかなければならぬわけですね。（注 中浜万次郎のアメリカ見聞記に、「大統領たる者は聰明でなければならぬが、再選をねらう者は、よほど聰明でなければならぬ」という意味の記述がある。レーガン大統領が、別の席でこの点に触れたのを受けての質問）あなたには、そのおつもりがありますか。

答 ええ、そのつもりです。今日の世界は大へん危険な状態にありますから、言葉や行為について無頓着であることは許されません。そして、世界が平和を目指して努力し、私たちが置かれている危険な状況から脱出しなければならないとしたら、それは今なのです。

問 そこで、もう少し深刻な話題に入るとして、私たち日本人は、自分が経てきた経験のゆえに、現在進んでいる軍備管理交渉で、非常にわずかな限られた進展でもよいから、ともかく進展が遂げられるよう、心から願っています。そして、中国との国交回復をきわめて成功裏に成し遂げるためには、非常に保守的だといふ定評のあつた共和党大統領を必要としたように、おそらく、あなたの強硬路線政策が東西緊張の緩和へと結びつくのではないか、と希望している人たちが日本にはいます。こうした希望や期待に照らして、これらの方交渉についてご意見を述べていただけないでしょうか。また、米ソ関係、とくに軍備管理の分野での米ソ関係の現状と今後の見通しについての評価をお聞かせいただければ、大へんありがたいと思います。

答 ご質問の前置きで、あなたは中華人民共和国について述べられましたが、たしかに、私たちは対中関係を改善しようと懸命に努力しており、信頼と友好を確立しましたし、また大きな進歩を遂げてきたと思います。台湾の私たちの友人に関連して、時おり持ち上がる問題があることを私は承知しています。これまで私

は繰り返し、中華人民共和国の指導者たちに、次のようにいつてきました。一人の友人をつくるために、別の友人を見捨てるつもりは私たちにはないという点を、彼らは理解しなければならない、と。それは、彼らにとつても安堵感を与えるのではないか、と思うのです。将来いつか、彼らが見捨てられるようなこともありますから。

しかし、ソ連に関しては、あなたは私の強硬路線のことをいわれたし、私自身もそう呼ばれていることを承知しています（笑い）。いわゆる「強硬路線」とは現実主義のことである、と私は思います。もう何年か前になりますが、労働組合の委員長をしていたころの私は、多少なりとも共産主義者を相手にした経験があります。もつとも、これはソ連ではなく、アメリカ国内の共産主義者です。ソ連に対し私たちとは、現実主義的でなければならぬ、と思います。これまでの一部の人たちのように、共産主義者も私たちと同じだから、彼らの善意や好意に訴えることができると考えるのは、よくありません。それは違います。彼らは非常に物質主義的で現実主義的です。彼らは世界において、いくつかの侵略的で拡張主義的な目標を持つています。たしかに、彼らと交渉することはできるし、話し合うことはできる、と私は信じています。けれどもそれは、ありのままの彼らを認識した上で行なうべきものです。それを提案するにあたっては、彼らが世界でとつている敵対的な態度を和らげ、世界の他の諸国とうまくやつていけば、それが彼らの利益になることを理解させるような方法で、提案を行なうのです。そして、これが強硬路線であるというのなら、私は強硬派です。しかしそれは、世界の巨大な核戦力に関してあなたが冒頭でいわれたことからも重要です。アメリカは、その交渉のテーブルにとどまるつもりはありません。私たちは交渉のテーブルにとどまり、さらにどれだけのミサイルが建造されるのか、その兵器をどれほど増加させるかについて、何らかの制限か上限を設定すべく、これまでの私たちがしなかつたことを試みていきます。アメリカは数量の削減を望んでいますが、現実的かつ実際的に、私たちがそうした道を歩み始め、その削減について彼ら

協力を得ることができれば、私たちは、それらの兵器の完全撤廃に向かつて歩み続けるべきです。

ずいぶん前のことですが、大統領に就任後のドワイト・アイゼンハワーは、わが国のある著名な出版社主あてに手紙を書いて、こういう趣旨のことを述べています。「私たちが直視しなければならないのは、次のような事実です。いま開発されている兵器からすると、これまでのように勝利か敗北で終わるような戦争は、もはやあり得ない。その兵器からすると、戦争は人類の滅亡で終わるだろう。そして、そういう時点に達したなら、世界を滅亡させないうちに、私たちは交渉のテーブルにつき、私たちの問題について交渉するだけの英知を持たなければならぬ」というのです。

私は、それと同じことを別の点から見ています。かつては、戦争のルールというものがありました。戦争は醜悪なものですが、しかし兵士が兵士を相手に戦い、一般市民を犠牲にしないというルールがあり、それが文明というものでした。ところが今日では、いま話題にしている兵器そのものが、何百万もの市民を殺すことを目的としているという点で、文明の何かを失っています。ですから、少なくとも、かつてののような見方に立ち戻ろうではありませんか。かりにも戦争のことを論じるのなら、勝利か敗北があり得るような形で、そして一般市民がある程度の保護を受けられるような形で戦争を論じるのです。

問　あなたは、現在の情勢はきわめて危険であるといわれました。そしてこの数ヵ月、私たちは相つぐ暴力行為をしてきました。フィリピンのアキノ氏の暗殺、大韓航空ジェット旅客機の墜落、ラングーンでの爆弾テロ事件、レバノンのペイールートでの爆破事件、そして中東やカリブ海などの世界の多くの地域に存在する地域紛争などです。私たちがきわめて危険な世界に生きていることは確かです。あなたの政府は、アメリカとその同盟諸国がもつと効果的な防衛能力を築くべきであると強く提唱してこられました。

そこでお聞きしたいのは、アメリカと、日本を含むその同盟諸国が軍事的にもつと強力になれば、世界が今日直面している危険を最小限に抑えられるだろうか、という点です。

答ええ。これは、私のいう現実主義の一部でもあります。かつての私は、労組の役員として組合のためにテーブルを隔てて多くの交渉を行なつたこともありますので、交渉のギブ・アンド・テークは心得ているつもりです。しかし、もうこの数年間、アメリカは、人類史上最大の軍事力増強を行なつてゐるソ連の指導者を相手に交渉のテーブルについてきました。そして彼らはテーブルの向こう側に座つて、私たちをながめ、アメリカが一方的に軍縮を行ないながら、それと引き換えに何も手に入れていないことを知つています。彼らは、何も放棄せずにすんだのです。私たちが自分の力を弱めたために、彼らの力が私たちすべてに対してもより強くなつていることを彼らは知つたのです。

軍備削減について現実的に交渉を行なうためには、一つの選択があることを彼らは知らなければなりません。彼らは軍備削減に加わるか、さもなければ次のような事実に直面せざるを得ないのです。それは、私たちは工業力を傾中して、彼らに戦争を始めることを思いとどまらせるために必要な力を築き上げるだろう、ということです。

彼らは、自分たちが弱い時には戦争を始めません。自分たちが、ほかのだれかよりも強いと思つた時に戦争を始めます。彼らが、私たちすべてに対して大幅な優位に立つていると思わせることは、大へん危険です。そうなると、彼らが侵略的になり、戦争を始めるのを防ぐものは何もありません。

ところで、彼らが、私たちの同盟諸国と日本とアメリカに太刀打ちできないことを知れば、どうなるでしょうか。もしも、私たちが防衛体制を強化しようと決意すれば、彼らは私たちに太刀打ちできません。そうなれば私たちが防衛体制を強化するに伴つて、彼らの力が私たちより弱くなることに気づくかもしれません。そうした事情が、アメリカのある新聞漫画に要約されていました。ブレジネフの死去前のことをでしたが、その漫画では彼がソ連の一将軍に、「われわれだけの軍備競争なら、もっとよいのに」と話しかけているのです。

問 質問を続けさせていただきますが、私がお話している危険性の一部は、米ソ対決という状況下でのみ起こるものではありません。地域紛争の一部にも、その根があると思います。どうも軍事的な解決にはなじまないような危機や危険があるので、これらの問題を解決し、世界全体の緊張を緩和するためには、軍事的な解決以外の何らかの方策を必要とするのではないか。

答 この質問の趣旨は、中東に関するものでしようが、かつては四方を海で囲まれたアメリカのような国は、自国内に防衛的な陸軍を置き、沿岸には砲台を築き、戦争が起こつたら、それは自国の海岸に波及するだろうから沿岸を防衛すればよい、と考えていました。しかし今日では、世界の各地に戦略上の拠点があり、中東はその一つです。西ヨーロッパの同盟諸国や日本は、工業諸国に中東石油を与えるとする者の手中に中東が陥るのを傍観していられるものでしようか。私たちは、そのエネルギー供給が遮断されるのを見ていてよいのでしようか。そんなことになれば、私たちは完全に破滅するでしょう。

そうした地域は、ほかにもあります。アメリカの産業が必要とする鉱物資源の半分以上は、世界各地から輸入されています。ある侵略的な国、おそらく他国に対しても陰謀を抱いている国も、そのことを認識しています。そうした国に手渡すわけにいかない戦略上の拠点が、どこにあるかを見きわめることが必要です。

カリブ海でのキューバの問題については、アメリカが必要とする必需物資を運ぶわが国の全船舶の半分以上がカリブ海を通つてくることを認識しなければなりません。第一次大戦でドイツの潜水艦隊がカリブ海に出動したことは、偶然ではなかつたのです。ソ連は、今や世界最大の海軍を築き上げ、その海軍の最大の部分は、この太平洋に、日本の周辺に配備されています。しかし、だれもが世界の戦略上知つていなければならぬことです。彼らは、あなたがたや私たちの生存に必要不可欠な狭い海上通路の数が限られていることを承知しています。まず、パナマ運河とエクアドル運河があり、ジブラルタル海峡、日本に通じるこの地域の諸海峡、マラッカ海峡、マカッサル海峡などがあります。世界全体でこうした海上通路の合計は、わずか十六

をかぞえるのみです。それらの狭い通路を支配し、私たちの船舶に対して通路を閉鎖できる国は、私たちのだれに対しても一回も発砲せずに勝利を手に入れられるでしょう。

問 このへんで、経済問題に移りましょう。

答 アメリカ経済は急速に改善していると聞いておりますが、失業率はいぜんとして高水準にあります。今後一年間のアメリカ経済の見通しや、アメリカの国内経済の改善が日米間の円や貿易の問題を解決するのに役立つかどうかについて、お聞かせいたきたいと思います。

答 アメリカ経済は改善しつつあります。私たちが通り抜けたばかりの景気後退は、この四十年ほどの間に経験した八回目のものです。そして、これまでいつもわが国の政府は、私にいわせるなら「即効薬」に訴えてきました。それは、通貨供給と政府支出を拡大し、国民への税金を増やし、それが国民の生産意欲を減退させました。たしかに、景気後退から回復したように見えても、その回復は人為的なものでしたから、二、三年ほどしか続かず、また次の景気後退に陥り、そのたびに景気後退は前回よりも深刻で悪いものになりました。

私たちが着手した経済計画は政府支出を削減し、国民の所得のもつと大きな部分を国民の手中に残すことを行なったものです。私たちは、政府支出ばかりか税金も減らしました。その目的は、最終的な真の回復を遂げることになりました。

現政権が発足した一九八一年当時のわが国のインフレ率は、約一二・五パーセントでした。十年足らずでのインフレをなくすことはできない、といわれたものです。当時のわが国の金利は、現在の二倍以上でした。私たちの計画が実行に移され、そして、国民の購買力に与えるだろうと私たちが期待した減税効果が現われ、そしてまた、人びとが所得のより多くの部分を手元に残しておけるというインセンチブもあつて、過去一年間のインフレ率は一・五パーセントほどになりました。先ほど申しましたように、金利も、一二・四

パーセントから半分に下がりました。前途はまだ遠く、最後に回復するのは失業ということになりそうです。しかしその失業率も、十月には、私たちの楽観的な予測によつてさえ、一九八四年末まで達成されないだろうと考えられていた率にまで下がりました。この一九八三年において、それほど遠い先のことと予測していた水準にまで下がったのです。

アメリカの失業率は、非常に高い水準から八・七パーセントまで下がりました。アメリカは、確固たる景気回復への道を歩んでいると私は思います。私たちの政敵は、この計画がうまくいかないだろうと主張して、それを「レーガノミックス」と名づけたものです。（笑い）ところが近頃では、そうは呼ばなくなりました。それがうまくいっているからでしょうね。（笑い）

さて、それが世界の諸国や日米関係にどう影響するかということですが、日米が行なうことは、世界経済に影響を及ぼします。世界は景気後退の最中にあります。日米は協力して、他の工業諸国を景気後退から脱却させるうえで力を貸すことができる、と私は思います。

問 あなたは今朝、国会で、アメリカでの保護主義という即効薬に強く反対してきた、と述べられました。しかし、保護主義的な立法が、日本からの輸入を制限する危険はいぜんとして残っています。こうした非競争的な立法が通過する、とお考えですか。そして、これに関して、日本が市場を一層開放するためにとつてきただ措置について、どうお考えでしょうか。

答 私たちは、心から賛同しています。私たちが話し合ってきたことのなかに、両国市場の間になお残つている相違点のいくつかがあります。そして私は、失業を理由にして、保護主義が解決策になり得ると考えて、いるアメリカ議会筋の危険な動きを指摘してきました。保護主義は、私たちが望んでいるすべてのものを台無しにしてしまう、と思います。私は、自由な貿易と公正な貿易を信じています。こうした法案を採択するようという圧力が議員にかかるますが、私はそれらの法案に反対です。しかし、彼らがそういう圧力

を受けていることを私は承知しています。彼らとしても、それに心を引かれて、それを話題にしています。これまで四十件ほどの法案が提出されたり、提案されたりしていますが、そのすべてが、何らかの保護主義の要因を盛り込もうとしています。

しかし、私が今朝の国際演説で申し上げたように、保護主義というのは、一人の男が船底に穴を開けてしまったのに、もう一人の男が別の穴を開けようとするようなものです。それでは、よくならないどころか、ずぶ濡れになってしまいます。私たちが船底に穴を開けるようなことを私は望んでいません。

問 残念ながら時間がなくなりました。最後にお伺いしたいことがあります。

あなたは、日米両国の個人的な接触をもつと拡大することに強い関心をお持ちである、と伺っています。

答 ええ。

問 これをどうしたら達成できるかについて、何か具体的な構想がおありでしようか。

答 あります。両国間の学生交流をもつと拡大できる、と思います。日本から一万四千人近くの優秀な若い人たちが現在、アメリカに来ていますが、アメリカからも、もつと多くの若者が日本に来るようになつて欲しいものです。ニューヨークにジャパン・ハウスがあるように、民間の資金を使って、東京にアメリカ・ハウスを設立しようということが、日米財界人の間で今話し合われています。このいずれも、文化交流や学生交流などをもつと盛んにすることを目指したものです。

そして、これまた、人びとがお互いのことをとやかくいうのではなく、じかに話し合うようになった一例である、と思います。

問 大へん残念ですが、時間になりました。参加者一同、厚くお礼申し上げます。

答 この機会を与えて下さって、皆さまに感謝します。時間がこんなに早く過ぎてしまつて残念です。私の発言が長過ぎたのでしょうか。（笑い）

一同 ありがとうございました。

(このインタビューは英語で行なわれました。ここに紹介した日本側の
発言内容は、英語から訳したものであることをお断わりいたします)